

児童・生徒に対する苦手意識とうまく付き合うには

－教員の苦手意識がやりがいや離職意図に与える効果－

前田 楓

(安田女子大学大学院文学研究科)

目的

本研究の目的は、教員が持つ児童・生徒に対する苦手意識（以下、教員の苦手意識）に着目し、そうした意識が仕事のやりがいや離職意図に与える効果について分析することにある。

教員の仕事上の人間関係は、児童・生徒との関係と職場の同僚や上司との関係に大別される（高木ら、2003）。一般に、これらの関係は独立に議論されることが多いが、本研究では、職場の人間関係を機能化させることによって、教員の苦手意識が持つ負の側面が緩和される可能性について検討する。具体的には、教員のやりがいや離職意図に対する苦手意識の効果を抑制する学校組織の協働性の効果を分析し、苦手意識とうまく付き合っていくための手立てについて考察する。

方法

調査対象者 小・中学校に勤務する教員 293 名（男性 203 名，女性 90 名，平均年齢 49.6 歳）。

質問項目 1) 教員の苦手意識：教員が苦手意識を持つような児童・生徒の特徴を 6 つ挙げ、各特徴に対する苦手意識について、「まったく苦手ではない (1)」から「とても苦手 (7)」までの 7 件法で尋ねた。2) 教員のやりがい：教員の仕事はやりがいがあるかについて「全くそう思わない (1)」から「強くそう思う (7)」までの 7 件法で尋ねた。3) 教員の離職意図：教員をやめたいと思ったことがあるかについて「全くない (1)」から「いつもある (7)」までの 7 件法で尋ねた。4) 学校組織の協働性：教員の苦手意識を抑制する状況特性を検討するため、学校組織の協働性を測るために著者らが開発した尺度（橋本・前田，2018）も質問項目として含めた。

結果

教員の苦手意識がやりがいや離職意図にもたらす効果と、その効果を抑制する学校組織の協働性を検討することを目的とする階層的回帰分析を行った。その結果、教員のやりがいについては、教員の苦手意識の主効果よりも、学校組織の協働性の主効果の方が強いことが示された。また、教員の苦手意識と学校組織の協働性の交互作用効

Table 1 階層的回帰分析 (DV = 教員のやりがい)

| | Step1 | Step2 | Step3 | Step4 |
|-----------------------|-------|---------|---------|---------|
| 年齢 | .075 | .036 | .069 | .073 |
| 性別 | -.078 | -.085 | -.061 | -.061 |
| 校種 | .026 | -.021 | .006 | -.007 |
| 苦手な児童・生徒 | | -.301** | -.195** | -.193** |
| 学校組織の協働性 | | | .391** | .395** |
| 苦手な児童・生徒× 学校組織の協働性 | | | | -.113* |
| R^2 | .008 | .094** | .235** | .248** |
| ΔR^2 | | .086** | .141** | .013* |

** $p < .01$, * $p < .05$ 回帰係数は標準化回帰係数を示す

Table 2 階層的重回帰分析 (DV = 教員の離職意図)

| | Step1 | Step2 | Step3 | Step4 |
|-----------------------|--------|--------|---------|---------|
| 年齢 | -.145* | -.121* | -.151** | -.154** |
| 性別 | .006 | .011 | -.011 | -.011 |
| 校種 | -.033 | -.005 | -.029 | -.021 |
| 苦手な児童・生徒 | | .183** | .085 | .084 |
| 学校組織の協働性 | | | -.360** | -.363** |
| 苦手な児童・生徒× 学校組織の協働性 | | | | .073 |
| R^2 | .022 | .054** | .173** | .179** |
| ΔR^2 | | .032** | .120** | .005 |

** $p < .01$, * $p < .05$ 回帰係数は標準化回帰係数を示す

果が示された (Table 1)。教員の離職意図については、学校組織の協働性と年齢の主効果が有意であった (Table 2)。

考察

本研究の結果から、教員のやりがいや離職意図に対して教員の苦手意識が持つ負の側面は、学校組織の協働性によって緩和されることが示され、教員が児童・生徒に対する苦手意識とうまく付き合うためには、苦手意識をなくそうとする個人の努力だけでなく、苦手な児童・生徒への接し方などを相談できる職場の協働的な風土が重要であることが示唆された。

興味深い知見として、教員の離職意図に対する年齢の効果が挙げられる。この結果は、離職意図に対して、学校組織の協働性とは独立に年齢が負の効果を持つことを示しており、職場の環境の改善とは異なる別の対策を必要としているという意味において、今後検討すべき重大な問題であるといえる。